

# “やさしいせいふく” に応援されて

やさしいせいふくサポーター 稲垣 貢哉

## “やさしいせいふく” とは？

“やさしいせいふく”は、人にも環境にもやさしい服づくりを通してよりよい社会の実現を目指す学生団体です。

ファストファッションが抱える社会問題や服との付き合い方を、買う側のひとが考える機会づくりも目的としています。

運営は中高（大）生で構成され、支えてくださる大人たちや企業と繋がり、問題に加え、「服は消費するものではない」という価値観を若い世代に発信します。

また、発信するだけでなく問題が起きてしまう原因である服の生産の構造の変革をしようと考えています。

“やさしいせいふく”は、最終的に、服にかかわる全ての人々の意識を変え、「ありがとう」と、笑顔が生まれる服づくりを世界中に浸透させることで、「自然」、「人」、「世界」にやさしい服づくりのかたちを作ることを目指しています。

## “やさしいせいふく” とのかかわり

お気に入りの服を着るとき、小さな子どもが得意げにお気に入りの服を持ってぐるぐる回ったり、買ってきたばかりの服を家族の前で着て即席のファッションショーが始まったり、衣服は私たちを笑顔にしてくれます。また辛い時には黒色や濃色の衣類で悲しさを共有することもあります。衣類は単なる布製品ではなく、私たちの気持ちに寄り添って、一緒に過ごしてくれる仲間だと考えています。

1987年3月バブル経済の始まりとともに繊維業界に身を置いてきた私は、さまざまな業界の変遷を見てきました。なかでもグローバル化という名のもとに巨大資本が主に開発途上国で衣類を低加工賃で生産するようになり、それに合わせる為に生地価格も下がって、大量の製品が低価格で出回るようになったことはとても大きな出来事でした。何を作るにも価格と納期が優先で、他社より早く安く調達できる地域を見つけることに腐心して、生産者に目を

向けることができない業界が出来上がってきました。過酷な生存競争の中で衣類の価値は下がり、質の高い生地を生産する人々は廃業に追いやられてしまいました。その結果、繊維業界の川下（ブランドと小売り）の効率を優先させる企業群だけが生き残る、殺伐とした繊維産業となりました。そこへ新型コロナウイルスの猛威が襲いかかり、瀕死の重傷を負い始めた2020年に“やさしいせいふく”は活動を活発化させたのです。

SDGsの教育でファッション産業の歪みを教育界の方々が取り上げてくださったおかげで、学生と私は知り合うことができました。

2017年、ある講演会で山藤旅間先生（当時は都立武蔵高校、現在は新渡戸文化学園教諭）から、“SDGs for School”でアースデーに出展するから学生と対談して欲しいと誘われたのがきっかけです。

今のメンバーの一部の人達には2018年のアースデーで出会い、2019年のアースデー後には有志による繊維の勉強会を開催しました。綿だけでなくウール、ポリエステルといった素材原料の作り方から変遷の歴史を一緒に学び、今の繊維産業の課題について話し合いました。

「作っている人が泣いているような服は着たくない」と叫んでみても、それでも自分たちの考えるようなブランドは無い…。その思いから、当初の活動『学生ブランド作っちゃおうぜ』が開始しました。

## 業界への働きかけ

「製品を製作したいので企業を選びたい」ということから、2020年1月23日に企業向け説明会を開催しました。企業から50人以上が参加して、その様子は業界紙に掲載されました。

数社の企業から関心が寄せられたので、春休みに企業審査会を計画しました。学生が企業にエントリーシートへ記入させて審査するというユニークな方法でしたが、コロナがまん延し始めた時期ということで全ての審査がオンラインとなりました。

審査会で彼らがパートナー企業として選んだ8社とは今も交流がありますが、残念ながら当初の計画



誰かが悲しみて涙した服を着たくないんです。  
わたしたちが今を変えていきます。

【学生ブランド作っちゃおうぜ】

わたしたちは身の回りのモノが環境や社会に悪い影響を与える素材を使用していない製品を求めています。まずは制服、体操服やスクールTシャツをサステイナブルなものに変えたい気持ちでいっぱいです。そして今まではあまり製品として企画されなかった病気で少し違った体型になってしまった子どもたちの洋服もつくりたいです。「だれも取り残さない」がルールです。わたしたちは一緒に学校や社会を変えていく企業・団体の方々を募集します。



である学校用の繊維製品はハードルが高くていまだ実現していません。

やさしいせいふくメンバーは、中高生が企業を審査、しかもオンラインで実施するという行動で大人も動かし、業界紙に取り上げられました。2020年11月9日には経済産業省を訪問して意見書を提出しました。その内容は、日本の繊維産業が人権の問題や環境問題に本気で取り組んでいないということを訴えたものでした。

欧米では社会問題に取り組むことを事業目的にしたブランドもありますが、多くは環境保護団体などの不買運動から企業価値を守るためにサプライチェーン課題の解決、使用する薬剤の管理などサステナブルに取り組んでいます。結果として、気候変動に取り組む企業が増え、素材の調達にメスが入り、私たちが手にすることができるサステナブル製品が増えていることは喜ぶべきことだと考えています。



【経済産業省訪問 2020年11月9日】

## 学校への働きかけ

やさしいせいふくの講演活動は同世代向けが多いのですが、中高生が中学校で授業をするという漫画のような出来事も体験しました。きっと学校でもミレニウム、Z世代の教員の方々が中心になってSDGsの達成が未来を残す手段だと考えていたのでしょう。中学校に行くと裏口で若い先生が教頭先生を連れて校内までご案内してくれました。その後に中高生によるメンバーが考案したワークショップやロールプレイングによるファッション産業の中学2年生への授業は静かに盛り上がり、次の時間は体育館を借りて中学2年生全体へのやさしいせいふくによる講演会へと続きました。その時には多くの先生方が集まり、終了後は校長先生からメンバーに図書カードが配られるという大団円を迎えたのです。

それからオンラインを中心にさまざまな学校へのプレゼンテーションを続けています。

その一方では、繊維業界からは何のリアクションもないのが日本業界の寂しいところです。

## やさしいTシャツ

やさしいせいふくメンバーは対立を好まず、自らのアクションでの変革を選択しました。自分たちでオーガニックコットンのTシャツを企画・販売し、それらを通じて、社会問題を学生中心に伝えていくというアクションです。

インド棉花農家の自殺問題から、農家の貧困と有機農業への転換支援を発想したり、子どもたちが学

校に通える環境を提供しながら Peace By Peace コットン財団 (PBP COTTON 財団, 注1) と連携して、支援地で生産されたオーガニックコットンでTシャツを作ったりという発想です。一見すると簡単なことに思えますが、繊維製品の生産にはさまざまな業者が介在してサプライチェーンを形成していることと、少量で生産ができないという問題がありました。

棉花の調達から生産までは、オンラインでの農家との話し合いと工場見学・従業員インタビューを実施しました。

特に工場見学では、インド工場の担当者が工場内を歩き回って工程の説明と労働者の管理状況を行っていること、オーガニックコットンとフェアトレードコットンしか使用していない工場であることを確認しました。その上で、若手の女子工員にやさしいせいふくメンバーが工場の対応やコロナ禍での生活について質問し、工場がきちんと管理されていて工員にも給与以外で食事の提供や帰省の際には特別手当を出したという話に納得し、この工場に発注することを決めました。

棉花からの糸生産(紡績)では最小量が棉花1ベール(=梱包)の400ポンド(約181kg)なので、1,000枚注文することにしました。生地製造(編立て)をした後で、白色に染色してTシャツにそのままプリントできる状態の生地を準備しました。

インドの工場からの仕入価格についても話し合いました。Tシャツは1枚当たり3.15ドルと工場から連絡がありましたが、その根拠を工場に聞いたり購入価格が不当に安くないかを調査したりもしました。

最終的にコストを開示して販売するという、日本のアパレルではありえない方法を彼らは採用しました(注2)。

話し合いの上で、サイズはジェンダーレスで5サイズ(表記をレディースSサイズの①からメンズのXLサイズの⑤まで)、洗濯ラベルは生地削減の意味からTシャツ裾部分に印字するなどの工夫もすることにしました。

プリントは、小ロット対応とプリント時の水使用

を減らすために顔料インクでのインクジェットプリントを採用するなどといった点も考慮しました。このように、“やさしいTシャツ”は何度も話し合い、工場の確認も取りながら進めていくことで、さまざまな角度から安心してご紹介できる商品になったのです。

学校に行くことができず棉花畑で働かされる同世代の子ども、不衛生・不適切な労働環境で長時間・低賃金で働かされる労働者、大量生産の果てに廃棄される衣類は誰も笑顔にしない。

“人にやさしい”, “環境にやさしい”, “世界にやさしい”を伝えることは、やさしいせいふくメンバーにとって仕事ではなく、部活動でもなく、自分の利益にもなりません。その活動を3年以上続け、加速させている彼らの目的は、世界中の繊維産業従事者や地球にとって本当にやさしい存在です。

### “やさしいせいふく”の現状

2022年、やさしいせいふくの活動は第一世代が大学生になり、活動初期には中学生だったメンバーが主体となってきました。立上げ、組織づくりと土台を築いて来た世代からのバトンは、中高生に引き継がれています。

任意団体であるやさしいせいふくには拘束力がないので、何人かのメンバーが途中で去っていくことを経験してきました。数度のメンバー募集で加わった新メンバーには、フォローアップの合宿プログラムが用意されています。合宿といっても、実際は長期休暇期間中にオンラインで実施されます。必要な知識や活動内容の伝達、高度に発達してしまったITツールの使い方などが主なプログラムです。その時に理解できなくても、過去のデータやオンライン上の会話メモ、すべての会議議事録はワークスペースに保管されています。伝達手段はSlackを使い、データの送信もその中で行われています。

これらのITツールの費用は、団体の設立当初から見守ってくれているITベンチャー企業の(株)エヌエルプラスが技術・支援サポートをしています。年に数回の活動報告と彼らの進捗状況は高校卒業後に電気工事士として現場で働いたのちにベン

注1 Peace By Peace COTTON 財団 (一般財団法人 PBP COTTON) …インドの棉花農家の有機栽培への転換支援、農家の子どもの就学や高等教育への支援をする団体。

注2 EVERLANE という USA ブランドは価格を開示しています。

チャーを上げた笠間一生社長の心を動かして、今日まで支えてくれています。

### 今後の課題

繊維産業は綿、ウール、シルクなど天然繊維中心のように見えますが、石油などを原料とするポリエステルやナイロンといった化学合成繊維が全素材原料の62%を占めています。特にポリエステル繊維の増産は2000年以降顕著になり、その生産量は2000年と比較すると2.8倍で、全素材の52%を占めるまでになってきました。データを分析すれば、ファストファッションによるアパレルの大量生産はポリエステルの増産とともにあるように考えられます。ポリエステルはとても有用な素材で使い方やリサイクルの方法をきっちり考えて使用していけば、気候変動対策にも活用できる素材です。天然繊維は、原料の生産や生物多様性を意識した調達により安心して使用できる素材で、更なる研究が各方面で進められています。新型コロナを経験して生き残った海外の繊維産業はもう同じ轍を踏みたくないという意識が強く、企業体の変革を進めています。金融機関がESG投資を打ち出していることにも呼応して、積極的に人権、環境、生物多様性に取り組む企業が“COOL（カッコイイ）”と称賛されるようになってきています。世代交代が進んだことも一つの要因ではないかと考えられます。

ここにきて日本のアパレルを中心としたブランド企業の元気の無さが気にかかります。商社に調達や生産を委託してきたことから素材への関心が薄れて、サステナビリティに関しては海外ブランドとの差が開いてきています。

日本のメーカーは海外ブランドに目を向けた商品開発、商社は海外での展開で市場を見ているため敏感に“金になるサステナブル”をビジネスに取り入れて、コロナ禍でも好業績の企業が見られます。

日本のブランドが“やさしいせいふく”の考えを学んで、生産背景を見直せば立ち直れるという思いで、日々市場を監視しています。

商社やアパレルは、常に新しいものを探しています。“学生初のSDGsブランド”は目新しく、清潔感もあることから、商社やアパレルが彼らに接触してくることが予想されます。既に商社から彼らの商品や取り組みの説明をしたいと話を持ち掛けてきています。利用されないように彼らをどうやって守っていくかが一つの課題です。

### さいごに

“やさしいせいふく”は、日本の学生が自分たちの衣服の背景に疑問を持って純粋に研究し、それを講演会などで発表して仲間を増やしてきました。変わらない業界に少し刺激を与えるために、説明のツールとしてのTシャツを開発、生産、販売しはじめました。次に何をするのかは分かりませんが、私はいつも彼らに応援してもらっている気持ちで会議に参加しています。日曜日20時からの定例会議、もちろんオンラインが楽しみです。

〔備考〕当原稿では、“棉花”と“綿”の両方を表記しています。農業では“棉花”を使用し、“綿”は糸、生地、洋服など収穫後の工業生産品に使用しています。



【“やさしいせいふく”メンバー】